

新進の映像作家達

超ヒット作『ラブひな』『魔法先生ネギま!』で人気

漫画家

赤松健

さん

(1993年文学部卒)

私費投じ、映画研究会保存フィルムをDVD化 今に生きる映研、アニメ研、漫画研での腕磨き

美少女ラブ・コメディ『ラブひな』で第25回講談社漫画賞(2001年度)を受賞、『魔法先生ネギま!』など超ヒット作で知られる漫画家の赤松健さん(1993年文学部卒)。映画研究会OBで、「劣化が激しいため」と同会が保存する映像フィルムを私費でDVD化する作業を近くはじめる。アニメーション研究会、漫画研究会でも活動したことが今に生きているという赤松さんは、後輩へのメッセージで「色々なことに挑戦してほしい」と強調した。

学生記者 駒田恵(法学部3年)

都庁に程近い東京・西新宿の超高層ビル群のなかでもひときわ目に付くオフィスタワーの1階ロビーの待ち合わせ場所に、赤松さんは半そでのポロシャツ姿で出迎えてくれた。

「ここに移って2年ぐらいでしょうか」と案内された赤松さんのオフィス兼アトリエは、とりの高層マンションにあった。窓からは新宿一体が見渡せる。さすが超売れっ子の漫画家だ、と納得してしまう。

アトリエでは、ふたりのアシスタントが机に向

かって仕事をしていた。背景描きや切り張りなどの細かい作業をこなす。赤松さんのもとには6人のアシスタントがいる。

20年前の8ミリフィルム

劣化が心配でDVD化を

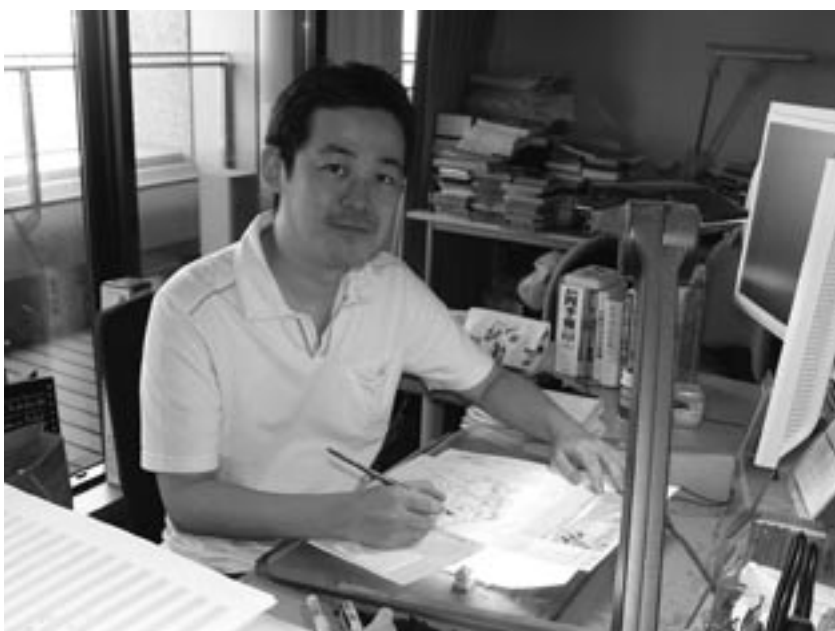
赤松さんは中央大学在学中に映画研究会に所属した。もう20年も前。当時、8ミリフィルムで撮影された映画研究会の映像作品は、今ではかなり劣化してきている。赤松さんが私費を投じて、す



ペンで線を入れるなど丹念な作業が続く

べての映研の保存フィルムをDVD化することを思い立ったのは、「このまま保存しているとどんどん劣化してしまう」という心配があったからだった。

「フィルムは生ものなので寿命があり、特にカビが生えてしまうことが多い」という。保存されているフィルムは40本ほどで、映画作品の他にプライベートビデオのような懐かしい思い出の記録もあり、そうしたものも含めてDVD化する。「映研出身者でこれから有名になる人も出てくるかも



しれません。だから、こうした作品をデジタル化して半永久的に保存することに意味があると考えています」と赤松さん。
保存作品の中には赤松さんが1989年に制作した『RUN-AWAY!』がある。「1年生の時に撮ったもので、制作に関わった全てのメン

バーが1年生でした。通常ですと1年生だけで制作の全てを行うことは滅多にないので、2年生から二ラまれたりしましたね」と懐かしげに当時を振り返る。

映画作りに熱中した1、2年 新人賞入選で漫画家の道へ

『RUN-AWAY』がビジネスジャンプ映像大賞をとったのがきっかけで、赤松さんはテレビ関係者の目にとまるようになる。当時はテレビ局がテレビ番組づくりに学生の力を借りようとする気運が高まっていた時期であったので、これを機にその後しばらく映像制作会社に入りにしていた時期もあった。

一日中アトリエにこもることが多い、という

「でも映画作りに熱中していたのは大学1〜2年生の頃ですね。ぼくは映画研究会とアニメーション研究会、漫画研究会と3つの団体に所属していて、2〜3年生の時はアニメ研究会、3〜4年生の時は漫画研究会に熱中していました」

アニメ研では映画とは違った作品づくりの手法を学んだ。パラパラマンガの要領で一枚ずつ描いた絵を固定したカメラで1コマずつ撮影した。そ

して漫画に熱中していた3〜4年生時代は週刊マガジンに投稿を始めた。才能に目をつけられた赤松さんは、同誌で漫画アシスタントを始めることになった。

赤松さんは就職活動も行い、編集者として働くことも考えていたという。しかし、そんな矢先に1993年、『ひと夏のKIDSゲーム』で第50回講談社漫画賞新人賞入選。審査員特別賞を受賞し、漫画家としての道を歩むことを決めた。

高校時代はマイコン部に所属していた赤松さんの1985年には、アクションRPG『パラディン』のプログラムを制作し、ボーステック社からそのゲームが発売されたこともある。

色々なことにトライ、チャレンジ 大学時代の活動がいまに役立つ

「失敗を恐れるあまり色々なことに手を出していました。一つのことだけに目がいつている人は失敗したときに逃げ道が無くなってしまいますよね。逆に色々なことをやっていると、それが少しずつ役に立ってくる時があります」

赤松さんがこう強調するのは、文字通りそれを実践してきたからこそだ。

ゲームのプログラム作りで培ったCGデザイン技術は、漫画の背景をパソコンで作るのに役立つている。またアニメ研でのアニメ制作経験でデッサン力があった。アニメではあらゆるアングルから

キャラクターを描く必要があるからだ。「キャラクターが振り向く場面では、右利きの漫画家の多くが苦手とする角度の絵が必要になるので練習にまりました」という。

「映研では映画制作の際に場面ごとの構図を考えたことが、漫画のコマ内でのキャラクターの効果的な配置につながっています。加えてストーリー仕立てなども映研でやってきたことが自分の作品に反映されています」

高校時代から大学時代に色々なことにトライし、チャレンジして培ってきたことを結実したのが現在の「漫画家・赤松健」なのだ。

海外でも大ヒットの『ラブひな』

読者の嗜好、喜びにあわせる

赤松さんの代表作の一つ『ラブひな』は、東大受験をテーマにした珍しい作品だ。

「自分の中でストーリーのプロットは、温泉旅館の跡継ぎに決まった少年が女の子に囲まれた環境で色々エッチな目に遭いながら大学受験をする、ということまでしか決めていませんでした」

大学は早稲田大学など私大を想定していたが、編集者の意見で東大になった。「最初は東大受験のことはあまり知らなかったのが不安でしたが、やはり日本の最高峰である東大にすることで話が面白くなったのでよかったですね」。『ラブひな』は、日本はもちろん海外でも大ヒットを記録した。



読者ニーズの把握が大切、と赤松さん

「『ラブひな』でぼくのやりたいことはほぼ達成されてしまったので、ここで考え方の変化が起こりました。それは読者の喜ぶことをやっていく、ということですよ。つまり読者の嗜好に合わせたストーリーを展開していこうと、いまは心がけています」

こうした姿勢は時に商業主義であるという批判を受けることもある。

「でもぼくはそれでいいと思っています。自分が面白いと思うものを一方的に読者に見せようとするのは作者の押し付けではないと思うので」

毎日、読者のニーズをチェック

中大の後輩育成にも努める

こう強調するからには、それなりの裏づけがあるからだ。赤松さんは、あらゆる手段を使って、読者の意見を集める努力をしている。自身のホームページでは日記を毎日更新し、読者を呼び込んでいる。作品の感想を書き込んでもらったり、オフ会を催して読者から生の声を聞き出したりもしている。

また、一時は編集者を志したこともある赤松さんは後輩の育成という目標も持っている。赤松さんのアシスタント6人のうち4人は中大の漫研、アニメ研のOBだ。白門祭のときに後輩の作品を見て、「うまい！」と思った学生に声をかけているという。

若くして漫画家として成功した赤松さんに、取材の最後に中大生へのメッセージを頂いた。

「繰り返しになりますが、逃げ道を用意するために色々なことに挑戦してほしいと思います。安定したものを一つだけやっていてもそれが見えなくなってしまうし、もし残念ながらそれがうまくいかなかった場合が怖いんです。好きなこと、やりたいことをいくつか準備しておきましょう。選択肢は最低でも5つくらいは持つといいと思います。色々やればやった分だけ他のジャンルでも役に立つ日が来るでしょう」



新進の映像作家達

第59回毎日映画コンクールアニメーション映画賞を受賞

アニメ作家・映画監督 **新海誠さん**

(1996年文学部卒)

みんなが楽しみ、自分も満足できる作品めざす

世界を席捲する日本発のアニメーション。そのなかで大御所に伍して着実に地歩を築いている本学OBのアニメーション作家・映画監督がいる。新海誠(本名・新津誠)さん
 〓文学部国文学専攻卒〓だ。劇場公開された連続短編アニメーション『秒速5センチメートル』でファンを増やし、注目度急上昇中だ。お忙しい合間をぬって、新海さんにインタビューした。

学生記者 **橋本奈緒美** (大学院理工学研究科博士1年)

——大学生の頃はどのような学生でしたか？

新海 僕は、あまり言うべきではないのかも
 しませんが、それほど真面目な学生ではありま
 せんでしたね。大学には行っていましたが、そ
 れよりもアルバイトに精を出していて、学校に
 ちよつと行って、そのあとバイト先で大半の時間
 を過ごすというような生活でした。

新海 やっていたのは塾のバイトでしたね。で

も、塾といつても2歳から5歳児が対象の、小学
 校受験のための塾だったので、やっていたのは子
 供と一緒にクレヨンで絵を書くとか、子供に絵本
 の読み聞かせをするとか、そんなバイトでした。

——サークルには入っていたんですか？

新海 児童文学研究会に入っていました。絵
 本を書いていたんですけど、それを近くの児童館
 で読み聞かせをしたり、クリスマスにイベントを
 やったりしていました。

バイトは子供の絵本読み

サークルでは絵本描き

——どんなアルバイトを？

——それも、絵に関することだったんですね。

新海 とにかく絵が好きで。このころは仕事と
 してとかは、全く考えていなかった。趣味として
 絵を描いていただけです。そんなところに就
 職しようか、何も定まらないまま大学4年間を過
 ごしてしまつて…。

——中央大学の思い出の場所は？

新海 法学部の建物の裏側、暗いところに自動
 販売機とベンチがあると思うんですけど、そこは
 よく行きましたね。パンと紙パックの飲み物を
 買って、一人でよく物思いにふけていました。
 次はどんな絵本を書こうかな、とか、授業とは全
 く関係の無い空想をする場所でしたね。

**5年間、ゲーム会社勤務
 28歳でフリーランスに**

——なぜアニメーション作家になろうと思った
 んですか？

新海 文学部を卒業した後、ゲーム会社に入社、
 5年間勤めたんです。でもその中で、映像表現が
 面白いなと思つて、28歳のときに独立することに
 したんです。

《新海さんは1973年2月9日生まれ、長野県
 出身。中央大学卒業後、パソコンゲームソフト開
 発・制作会社に就職。パソコンゲームのオーブニ
 ングムービーを制作する傍ら、自主制作アニメを
 制作。『遠い世界』(1998年)、『彼女と彼女の

猫』（2000年）が評価され、5年間勤めた後、退社。フリーランスになる。

2002年に公開された『ほしのこえ』は、25分のフルデジタルアニメーションで、ほとんど一人で監督・脚本・演出・作画・美術・編集を行った。映像の美しさ、今までのアニメとは一味違うクオリティーの高さが注目を集め、第1回新世紀東京国際アニメフェア21公募部門で優秀賞を受賞した》

——企業を辞めてフリーになるのは、結構勇気がいらすよね？

新海 毎朝6時に起きて、電車に乗って通勤するのが、もしかして向いていなかったのかもしれない。人生やっぱどこかで踏み出す必要がある



新海誠さん

と思うんです。僕の場合、それを親が「25歳まで」と区切りをつけてくれたわけです。それがよかったのかな、とも思います。

——25歳まで、ですか？

新海 というのも、僕は家業を継ぐこともできませんでした。でも、大学で東京に出てきて、「就職も東京で」と言ったら、親が「25歳までに何とかしろ」と。「だめなら戻って家業を継げ」と言うんです。はじめは「なんだよ」と思っていました。が、今では逆にその区切りがあったから踏み出せたとし、よかったのかなと思っています。

独立し、すべて自分の責任に 自分が分らない学生時代

——フリーランスになって変わりましたか？

新海 アニメーションを始める前までは全て、やっていることは仮のものだ、という意識はありました。100%自分のやりたいことではない、望んだことではない、という意味ですね。でも、アニメーションを始めたことで、そのような言い訳をする態度を全て断ち切ってしまった感じです。全て自分の責任ですからね。

でも、会社に勤めたことは決してマイナスではなく、むしろ経験してよかったと思っていますよ。色々な経験が出来ましたから。

——就職活動は大学生にとっては、一つの大き

な壁です。新海さんは、就活はどのように感じていましたか？

新海 僕も何かになりたくて大学を選んできたわけではなくて、就職のためのステップとして大学を選んだわけでもなかった。かといって高校を卒業してすぐに働く、という覚悟もなかったし：そんな気持ちで大学に入学しちゃたわけです。

でも、就活では自分をアピールしなければならぬし、自分のやりたいことを主張しなければならぬ。本当はそんなに思っていないのに言わなければならない、そんな感じになってしまうんですよね。自分もその一人でしたからよく分かります。

——早くから目標が決まっている人もいます。

新海 高校生から目標がはっきりしていて、大学に進学してからも、その目標に向かって進んでいく。そして希望の仕事に就く。それはそれでいいと思います。

でも目標が決まっていなかった頃の不安というのは、自分にとってはとても大きかったように思います。

大人になる？社会に出るとは？

あの頃の不安が作品作りの根幹

——どのような不安ですか？

新海 大人になるとはどういうことか。社会に



新海 個人的な意見としては、大学4年の間に（自分の仕事の）問題をクリアにしないでいいんじゃないかなと思って

います。早く目標が見つかって、実現したとして、30歳くらいになったとき、飽きてこないかな、とか逆にそんなことを考えてしまいますね。

——新海さんは大学生のころから絵が好きでしたが、好きなことってなかなか見つけれられないんじゃないか、と思うのですが。

新海 とりあえず何かを一生懸命やってみる、というのも打開策の一つとしていいのではないのでしょうか。僕も、社会に出たことがないくせに、社会というものを怖く思っていました。でも怖いからと言って何も動かないのでは先に進めません。ならば出てみるといい。一つひとつクリアしていくために、そんな風に思います。

影響を受けた『天空の城ラピュタ』

1月からロンドン生活で充電中

——夢はなんですか？

新海 誰もが楽しんでくれるアニメーションを作りたい、自分が心から満足できるアニメーションを作りたい、というのが僕の夢です。

《新海さんの初の劇場長編作品は『雲のむこう、約束の場所』（2004年公開）。この作品で、宮崎駿監督の『ハウルの動く城』などの作品を抑えて第59回毎日映画コンクールアニメーション映画賞を受賞した。

最新作の『秒速5センチメートル』（2007年3月公開）は、一人の少年を軸にして描かれる独立した3本の連作短編アニメーションで、挿入歌に山崎まさよしを用いたことでも話題になった》

——影響された作品は？

新海 宮崎駿監督の『天空の城ラピュタ』が、中学生だった僕にとっては100%よかった作品です。今ではもっと違った視点の作品がいいと言ってしまうかもしれませんが、でも、あの頃の僕には100%だったんです。

そんな風に、それぞれの人間が、一生のうちどこかで、「この作品が100%だった」と言ってもらえて、かつ、自分でも「これは100%だった」と思う作品が作りたいと思っています。

《新海さんは今年1月から単身ロンドンで生活している。新たな作品の構想を練って、充電中だ。帰国後の活躍が楽しみである》

——でるとはどういうことか。心からやりたいこととは何か。どうやって生きていったらいいのか。とにかく何をしたらいいのか分からない。居場所探しですね。部屋から一歩も出ない日もよくありましたね。

——いろいろと、もがいていた？

新海 そう。今でも、あの頃の不安な気持ちは夢にも出てくるし、作品づくりの根幹のどこかにあるものだと思っています。これらの気持ちを通じて、作品の中で『大人になるはざま』を描いている感じです。

——不安に思い、悩んでいくうちにやることが見つかってくると..。

新進の映像作家達

スペイン国際映画祭で最優秀監督賞受賞

ドキュメンタリー映画監督

山本起也さん

(1988年法学部卒)

出回がわからないから、恐いドキュメント
自己の批評精神と創作意欲との闘い

”苦節“20年にして初めて受賞したのが、スペイン国際ドキュメンタリー映画祭最優秀監督賞。受賞作は、住み慣れた家を取り壊されることになった祖母をカメラで追った『ツヒノスミカ』。ドキュメンタリー映画監督、山本起也さん(1988年法学部卒)は「まさか賞なんて」と驚くが、撮っていくうちに行き着いたのは「生と死」という普遍的なテーマだった。お話をうかがった山本監督の映画論もまた、大変興味深い内容だった。

学生記者 武田朋実(法学部3年)

804作品の中からノミネート

祖母を追った受賞作『ツヒノスミカ』

2作目の『ツヒノスミカ』で、最優秀監督賞を

受賞したスペインの国際ドキュメンタリー映画祭

(スペイン・パンプブローナで08年2月15〜22日開

催)には、世界各国から804作品の応募があり、

そのなかから25作品がノミネートされた。



スペインでは「ワインを堪能した」という

「スペインでは水並みに安いワインを堪能して
いましたよ。飲んでスタツフらと映画談議。た
だひたすら飲んでいましたね」と屈託がない。20
年以上映像に携わっていて、「受賞経験なしのヘッ
ポコ」というから、映画賞など縁がないと思っ
ていたのも無理からぬことなのだろう。

それが、「最優秀監督賞」受賞である。最終日
前日の夕方に受賞を知ったというが、そのとき「も
しかして(第1席の)グランプリ?」と咄嗟に思っ
たというから、これもまた屈託がない。

映画の配給会社などが、映画祭に売り込みに行
くような大作と違って、『ツヒノスミカ』の展開は

「ヘッポコなりに、長くやっていけばいろんな
ことがあるんだな」と思いました。招待(ノミネー
ト)されただけでも驚きなのに、まさか賞なんて
ね」

明るく表情を崩す山本監督。ジーンズにTシャ
ツ1枚、それに流行のヘアメイク。失礼ながら
とても40歳を超しているようにはみえない。



「自分たちだけでやっている家内手工業のようなもの」という。「そういう意味で、今回は審査員5人に映画自体をストリートに見て、評価してもらえたということだと思います」と素直に受賞を喜ぶ。

『ツヒノスミカ』をつくるにあたっては、「日本映画のリズム、間、呼吸を意識した」という。

ただ、映画祭で評価を受けたのは、「西洋人が東洋のオリエンタリズムを珍しがった、といったことではない。表面では何もドラマチックなことが起きないけども、その内面には起伏がある。この、ばあちゃん面白いな、単純にこの、ばあちゃんに会ってみたいな、という人間への興味だと思う」と受け止めている。

祖母との長いお別れの思いで 何かに突き動かされるから撮る

『ツヒノスミカ』は、山本監督の祖母の家がとり壊される様子をカメラが追った作品。10数年前に夫を亡くした後もずっとひとりで住み続けていたおばあちゃんが、自身の妹を風呂場の事故で亡くした後、突然「ひとりには寂しい」と言い出す。それで、息子（山本監督の父）夫婦と同居できる家を新しく建てることにしたのだ。

映画では、家財道具の小物を整理するおばあちゃんとその息子が、「これは捨てないで!」、「えっ、捨てないの!」などともめるシーンがある。

「撮っているうちに、まるで二人が遊んでいるように見えてきて。だから、家を壊すのは、久しぶりに二人の時間

を過ごすための親父の策略だとすら思えたくらいです。親父には母親をいつか失うという恐怖があつて、だから、親父にとつて長い片付けは長いお別れなんですね。そして、親父だけではなく自分も、それを撮りながら、ばあさんと長いお別れをしているんだなと思えましたね」

山本監督は、なぜ祖母とその家を取り壊すドキュメンタリーを撮ったのだろう。やはり聞きたくなった。

「ドキュメンタリーっていうのは、自分の中に何かひっかかりや、突き動かされるものがある、でもそれが何かわからないから撮るんですよ。テーマが最後までわからないけど、何かあるから撮る。でも最後にそれがわかる。そこで撮影を終えて編集に入るんです」

いつしか「生き死に」の話に 模擬で撮った葬列シーン

『ツヒノスミカ』では、「撮っていくうちに生き死にの話になってきて、生と死の境、そのあわいを表現したくなった」という。だからであるうか、この映画の最後に葬列のシーンがでてくる。このシーンをわざと入れたのは、『死』を映画に刻印するため」だった。

実はこの葬式は模擬、つくりものだ。山本監督は、「現実のばあちゃんが死んでも、生きていても映



ファッションも若々しい山本起也監督

画ではどちらでもいいというか、それは関係ないんです。事実や現実を描くのでなく、真実を描くのが映画」という。つまりドキュメンタリーでも創作部分があっても差し支えないというのである。「映画って全部作画的です。撮って、あとでバラバラにして再構築するから、編集でどうつなぐかで見え方が変わってくる。カメラという道具も、フレームのなかのものしか撮ることができない。それも自分の意思で切り取っていて、どこを切り取るかで見え方が違ってくる。つくり手の作為が入るんです。だからドキュメンタリーはすべて極端に言えばやらせです」

ちよつと意外な説明だったが、山本監督は「報道のドキュメントとは違いますよ、映画は」と付け加えた。よく聞けば、ドキュメンタリー映画の作り方が分かってくる。

映画は作為、でもいけない「やらせ」もある 4回戦ボクサー追った処女作『ジム』

映画が作画的だからといっても、「やっていいやらせ」と「やってはいけないやらせ」があるという。「例えば、ばあちゃんの家が壊されるときに、ばあちゃんの寂しそうな顔がほしいから、『悲しそうな顔をして』とか『寂しいって言って』など

と要求する。こういうのを俗にやらせと言うんでしょう。これはやってはいけないこと。下品です」。「ドキュメンタリーは、出口がわからないから、恐い。最後に出口があるのかもわからない。撮るといふことは、こんなつまんねえんじゃないかという自己の批評精神と創作意欲との闘い」と強調する。

山本監督の1作目『ジ

ム』は、広告映像の会社に在籍中、撮影を中断した2年半をはさみ、約6年間にわたって撮りためたものだ。「広告映画は会社側が見せたいものだけど、ふつう映画は観客が金を払ってでも見たいもので、ベクトルが逆。そういう似て非なるものところにいるのが自分にとって一番不健康だった」と、その当時を振り返る。

処女作『ジム』では、その撮りためたフィルムを編集するため、広告映像会社を退社する。34歳だった。「もうどうにでもなれと思っていて、これでだめだったら、きれいさっぱり映像の世界とはおさらばするつもりでした」。

『ジム』では、ボクシングジムに通う4回戦ボクサーたちを丹念に追いかけた。ボクシングが好きで、好きな映画も中学のころ観た『ロッキー』。映像の仕事に就いたものの「パツとせず」、仕事から帰ってきたあとつけたテレビのボクシングの試合を見て、「俺も負けているけど、あゝ、またこいつも負けたよ、って思ってた。自分と同年代のボクサーと、そのときの自分を重ね合わせていた。『ジム』を撮るようになったきっかけがここにあった。

ボクサーに託した、「いつか」は来る
ドキュメント映画の達成感は、「排他感」

約6年に及ぶ撮影の間、2年半の中断があつ



記者の質問に丁寧にこたえる山本監督

た。「もう構成がわからなくなつてやめたんです」。しかし、中断があったからこそ「見えてくるものがあった」と話す。ボクシングに一心不乱に打ち込んでいた4回戦ボクサーたちのほとんどは、2年半の間にジムを去っていた。

「ラスト、その中で一人だけ残つた矢原というボクサーの戦う姿で映画は終わります。矢原にも

やがてボクサーとしての終わりが来る。でも映画の中の矢原は、いつかを夢見ながら、いつまでも戦い続けるんです。ヘッポコでも、続けていればいつかは来ると、僕自身が思いたつたのかもかもしれませんね」

映画を撮つての達成感は何ですか？と問うと、想像もしなかつた言葉が返つてきた。「排泄感」

だという。「その瞬間にはき出したもので、そのときにしか撮れないもの」という意味だ。その時の自分がいやおうなしに反映されるため、「何を食べているかが、ばれる」というから難しい。

「映画は自己表現ではない」と強調。「シンガーソングライターではダメなんです。映画の主人公は観客だから、観客が想像できるステージが広ければ広いほどいい」と解説する。「今回賞をもらえたのは、やっとな誰かが、おまえはそれでいいんだよ」と声をかけてくれたという安堵感でしかないのだそうだ。

制約多いフィルムへのこだわり つくり手の緊張感が映像にでる

1作目の『ジム』、2作目の『ツヒノスミカ』とも、16ミリフィルムで撮つた。ビデオの場合はテープも安く、長時間連続し

て撮ることができる。画像と音声も同時にとれる。他方、フィルムはビデオとは比べものにならないくらい現像費がかかり、フィルムの限られた尺分しか連続してカメラをまわせない。画像と音声も別撮りしなければならないという大きな制約がある。

しかし、山本監督はフィルムにこだわる。「手足がもがれたような制約ゆえの緊張感がある」からだという。ビデオはずっと撮つていられるので、ルーズでいい加減なものになってしまう恐れがあるが、さまざまな制約があるフィルムは違う。「何を撮るかを追いつめて撮つた方が、画像の密度が違う。つくり手の緊張感あるなしが、映像になつた時にばれるんです」。

次回作では、昔気質の『職人』を撮る計画だ。山本監督もまた「職人」である。

《やまもと・たつや 1966年静岡生まれ。1988年中央大学法学部政治学科卒。電通ブロックス（旧電通映画社、現電通テック）入社。2000年5月からフリーの映画監督に。処女作『ジム』は2003年に各地で公開。2作目『ツヒノスミカ』が、スペインの国際ドキュメンタリー映画祭 PUNTO DE VISTA で、最優秀監督賞（ジャン・ピゴ賞）を受賞。京都造形芸術大学准教授》